第10号（2018年夏号）
発行日　2018年7月20日
信州大学教職支援センター
Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センターニューズレター

巻頭言　＝教育実習を参観して＝

今年も概ね無事に、教育実習を終えることができた。実習から戻ってきた学生たちは、口々に、「実習は楽しかった」と報告してくれる。教材研究の苦しさや授業が立ち止まってしまった悔しさよりも、受け入れてくださった先生方やともに学んだ生徒たちとの人間的なつながりの充実の方が勝ったといえ、この経験は学生たちがたとえ教職に就かなくても、これからの人生の様々な場面で生かされることであろう。

しかし、教育実習生の研究授業を何校か参観したが、生徒が理解できない発問・一問一答式の授業展開等「主体的・対話的で深い学び」とは、ほど遠い学習展開が見受けられ、教育課程や教育方法を担当する私自身の授業改善の課題は山積みである。

そのような中、気になるタイトルの本、「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」(新井紀子著:東洋経済新報社)が売れているらしい。たぶん、世間は「ＡＩ」という言葉に魅かれているのだろうが、私が気になるのは、「教科書が読めない子どもたち」というフレーズである。

学生時代、大学院を修了した先輩が、都内で当時教育実践がトップレベルといわれた公立小学校に着任して1ヶ月後、「現場に出てわかったことは、優れた教育実践をしている教師のクラスの子は、みんな教科書がきちんと読める。教科書を読めるまでにする指導が大切だ」という話をしてくれたことを思い出したからである。

平成元年の「新学力観」に基づく学習指導要領の改訂を皮切りに、平成時代には３回学習指導要領が改訂された。平成の30年間一貫していたのは、「生きる力」の育成に向けたコミュニケーション能力や、基礎的・基本的能力や資質の育成、さらには、そのための言語活動の充実ではなかったのだろうか。

ところが、中・高生の「論理的な読解と推論」能力を、新井先生が教科書の記載文を活用して調査した結果が、「教科書が読めない子どもたち」というのである。

これが事実で、教師が授業設計の前提条件を、「教科書は読めるはず・理解できるはず」としているならば、子どもたちの実態との間に乖離があり、「深い学び」を目指そうにも空回りということになってしまう。

教えることと、学び考えさせることを再確認し、新しい時代には、「読めない子どもたち」といわせない教育実践の充実を期待したい。

副センター長
小山　茂喜

［教育実習生の説明に集中する生徒たち］

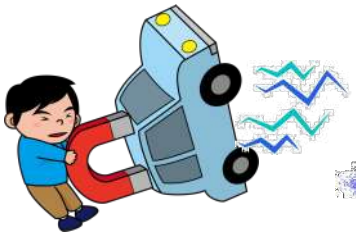
教職支援センター

シリーズ　活躍する卒業生

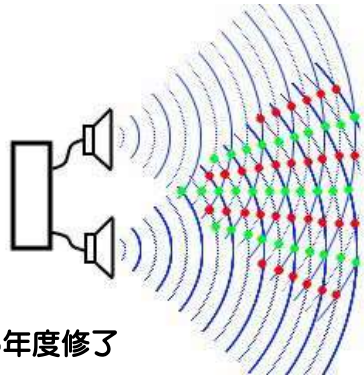
教職支援センターの前身の教職教育部が発足して１０年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.5　物理科編 ～

愛知県立春日井商業高等学校　教諭



丹羽　博康　先生



信州大学大学院　理工学系研究科　物質基礎科学専攻　平成26年度修了

愛知県で理科の教員になり、今年で４年目になりました。昨年まで普通校の勤務でしたが、今年から商業科の専門校での勤務になり、昨年までとは全く違う生徒を前に戸惑いながらも、生徒が理科をどうしたら好きになるか、日々考えながら楽しく過ごしています。

初任時は、授業もままならず、日々過ごすことで精一杯でした。２年目からは環境にも少し慣れ、多くのことを生徒から学べるようになりました。例えば、私に自信がないときは、生徒はそれを感じとり不安そうになります。また、誠実に向き合えば、それに応えようと、こちらが考えている以上の返答や行動をしてくれるときもあります。これら生徒との一つ一つのやり取りを通して、自分の未熟さを感じながら、日々成長も感じています。

教員になって一番感じるのは、アンテナを高くして様々なことに興味を持ち、常に勉強をしていかなければならないということです。例えば、理科教員は、自分の専門分野はもちろんですが、専門以外の分野の知識を求められることが多々あります。私の専門分野は物理ですが、化学・生物・地学の知識はもちろん、世界史の知識などがもっとあれば生徒にわかりやすく、楽しく教えることができるのにと思うことが多々ありました。また、現勤務校では、理科は「生物基礎」と「科学と人間生活」の授業のみです。専門分野ではないから、「教えられません」は通じません。楽しくわかりやすい授業をめざし、日々試行錯誤しながら勉強していくしかありません。

教員は授業以外にも校務分掌、担任、部活動、生徒指導、進路指導、生徒の心のケア、保護者・近隣住民への対応等、非常に多くの能力を求められ大変な面も多々ありますが、生徒の成長していく姿を最も身近に感じることのできる非常に面白い職業だと思います。私自身、生徒がより高く成長できるように、常に研鑽を重ねていきたいと思います。

石川県　能美市立根上中学校　教諭

前田　彩那　先生

理学部　物理科学科　平成26年度卒業

私は、中学生の頃から、教員になることを夢みていました。そのため、理科の教員を志し、理科の専門的な知識を身につけたいと思い、信州大学の理学部に進学し物理について学び、その後、金沢大学大学院で、理科教育について学びました。

そして現在、地元石川県で中学校の理科教員として、働くことができています。教員として働く中で、学生時代に学んだことを生かせることがたくさんありました。

まず、教材作りについてです。信州大学で夏休みに行われた「青少年のための科学の祭典」では、理科の不思議や面白さを感じられる装置での実験の演示や、子どもたちへの実験工作指導をしました。また、風車を題材に授業を考えるという活動では、様々な種類の風車をペーパークラフトで作るという経験もしました。

理科の授業では、毎回どのような教材を提示し、生徒にどんなことを考えさせ、その課題をどのような実験・観察で解決していくかを考えなければなりません。学生時代に作成した教材がそのまま使えることもありますが、多くは新たに作ります。授業後、「先生、今日の授業面白かった！」「なんで、こんな風になるの？」と、生徒がいってくれたときは、理科の授業にとてもやりがいを感じます。学生時代に様々な教材を作っていたことや、教材作りの視点を得ることができた経験を生かすことができていると感じています。

次に、人との関わり方についてです。教員という職業は、生徒、保護者、地域の方、そして同じ教員など様々な年齢と立場の人と関わり合います。そのため、学生時代はサークル活動やアルバイトを通して、多くの人と関わり、価値観を広げることのできたことが生かされてると感じています。今年私は初めて、担任を任せてもらいました。中学1年生。33人の担任です。毎日、彼らといろいろと話をする中で、33人の性格や個性が少しずつ分かってきました。生徒の個性や価値観を受け入れることができるのも、学生時代様々な価値観の人と関わってきたからかなとも考えています。また、教師になって、校長先生から「教員としての思いや願いを伝えることが大切である」と教えていただきました。

その教えをもとに、生徒との関わりの中で、私が33人の生徒にどんな姿で中学校を卒業してほしいか考え、それを伝えるようにしています。教員として、人との関わり方を、現場で学ぶ毎日です。

教職支援センター　4月～6月の動き

○新入生教職ガイダンス(4／5.6)、○高年次生教職ガイダンス（各学部ごと4/3～11）、○CST講座開講(5/15)
○長野県総合教育センターとの連携連絡会(5/16)、○長野県教育委員会との連携協議会(5/17)、
○松本市教育委員会との連携交流会(5/18)、○CST養成プログラム実施委員会（6/26）
○各教育委員会･校長会への協力依頼訪問(松本市:4/26、上田市:5/31、南箕輪村:6/22、伊那市:6/22)
○教職支援センター運営委員会(6/18)、
○教員免許更新支援センター会議(5/9、6/21)、○教員免許更新支援センター運営委員会(6/26)

学芸員養成課程の授業担当教員だより

[私の博物館体験から]

○博物館体験の始まり

松本で生まれた私の博物館体験は、今の松本市立博物館の場所にあった、「市立博物館」と「市立動物園」です。動物園は今はアルプス公園の一角に小動物のそれがありますが、昭和30年代、今の市立博物館の場所に博物館と並んでありました。もちろんその規模は小さなものでしたが、博物館の隣にあったことを妙にうれしく感じたことが思い出されます。松本城二の丸の北西にあった「遊園地」とともに、子どもに人気の場所でした。

○松本市立博物館

市立博物館は、明治39年（1906）に「明治三十七、八年戦役紀念館」として開館した施設を、昭和23年（1948）に山岳・民俗・考古・歴史・教育の5部門をもつ総合博物館として開館したものでしたが、老朽化が進んだことから、昭和43年（1968）に新築、「日本民俗資料館」の名を冠して新たに開館しました。その施設も老朽化し、数年先に大名町に新築移転することになっています。思えば、市立博物館をめぐる長い時間を体験したことになります。

○長野県立歴史館

大学で学芸員養成課程を取っていた私の実習先も日本民俗資料館（松本市立博物館）でした。今から思うに、原体験の場所を選んだということかもしれません。

学芸員への展望を秘めつつ、歴史研究への道を進みましたが、日本古代史という「飯のねたにならない」なかなか困難なテーマで、展望の開けない「過酷」な道でした。

運よく新設予定の「長野県立歴史館」の開館準備室に所属することができたのが30代半ば、開館を経て昨年まで24年間、学芸員として勤務することができました。

○学芸員の養成と大学史資料センター

歴史館在職中から本学の学芸員養成課程の講座を担当し、学芸員養成の一端に携わってきましたが、昨年4月、本学の70周年記念事業の一環として、本学の歴史に関する資料の収集・整理・活用を目的とする「信州大学大学史資料センター」が設置され、現在そこに勤務しています。

○課題と将来への展望

学芸員養成課程の講座を担当するなかで感じていたことは、大学としての博物館教育(学生教育)のための資源(資料)の管理・活用が不十分だということでした。

理学部の自然科学館の先駆的な取り組みや、今回の大学史資料センターの開設をふまえ、その先にそれらを統合した「信州大学総合博物館（資料館)」のような資料保存、学生教育、展示公開施設が大学全体を視野にできればいいなあ、と感じています。

（大学史資料センター　福島正樹）

編集後記

介護等体験、教育実習、教員採用試験…と、教職の高年次生にとって忙しくも充実した季節がやってきました。1年生は、教育学概論や教職論の学期末課題に取り組んでいる頃でしょうか。今は300名弱いる教職課程の1年生が、高年次になってもくじけず免許を取得していけるよう、センター教員一同、尽力したいと思います。皆様もお力添えをよろしくお願いいたします。（広報担当　河野桃子）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教職支援センター

■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1　■TEL: 0263-37-3367　■MAIL: kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL: http://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/kyoushokutop.html